

中近世西アジアにおける史的テキストの参照・改変・転用とその主体・受容者についての
国際的・学際的研究 (jrp000301)

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

The contents of this report are the intellectual property of their respective authors.

Please do not circulate or cite without authors' permission.

--

イベント名：

2024 年度第 3 回研究会(通算第 3 回目) /German-Japanese Bilateral Conference: Textual Transmission in the Islamic Manuscript Age: On the Variance, Reception, and Usage of Arabic and Persian Works from the Middle East to the Indian Subcontinent

日時： 2024 年 9 月 5 日～9 月 7 日

場所： ミュンスター大学中国学・東アジア研究所 セミナー室 RS23

公開の範囲： 公開 (事前登録制)

開催方式： 対面

参加人数： 38 名 (うち外国人 28 名、共同研究員 8 名、所員 2 名)

使用言語： 英語

プログラム・要旨： 別紙参照

内容：

9 月 5 日～7 日の期間、ミュンスター大学中国学・東アジア研究所にて、「中近世西アジアにおける史的テキストの参照・改変・転用とその主体・受容者についての 国際的・学際的研究」2024 年度第 3 回研究会(通算第 3 回目) /German-Japanese Bilateral Conference: Textual Transmission in the Islamic Manuscript Age: On the Variance, Reception, and Usage of Arabic and Persian Works from the Middle East to the Indian Subcontinent が開催された。

本会議は、研究代表者神田惟 (AA 研) と研究副代表者 Philip Bockholt (Universität Münster) によって企画され、AA 研、Universität Münster、Fachbereich 09 Philologie、Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG)、Translapt の共催で、日独両国の大学に研究拠点を置く、歴史学・美術史学・文学研究者 20 名 (うち 10 名は本共共課題メンバー) による研究報告 (報告時間 20 分 + 質疑応答 10 分) を含む形で開催された。

初日は、南アジアにおける、写本の筆写を介した知識移転・テキストの改訂や、アラビア語からペルシア語へのテキストの翻訳に関する報告が行われた。続く第二日目・第三日目には、中近世の西アジアおよび中央アジアにおける、アラビア語及びペルシア語の多様なジャンルの「史的テキスト」の伝播に関する報告が行われた。本会議における研究報告のリリース・クエスチョンは、以下の 5 点に集約される：

- (1) What type of narrative or motif in literary and historiographical works is selectively transmitted from one context to another?
- (2) What changes in content can be demonstrated here, and to what factors can they be attributed?
- (3) Which actors were involved and how?

(4) How did the transmission of knowledge take shape with regard to phenomena such as collected manuscripts (*majmū'a*) with partial sections from works or abridged versions (*mukhtaṣar*)?

(5) What does this say about the contemporaneous understanding of texts and knowledge?

総じて、研究報告の質は非常に高く、共共課題の研究会を英語で開催する意義を十分に示した会議であったと評価できる。また、参加者の満足度も非常に高く、今後の日独両国の研究機関間の協力体制の礎が築かれたと言っても過言ではない。次回は日本での開催を望む声も多く聞かれた。

集計可能な範囲では、38 名（外国人 28 名、共同研究員 8 名、所員 2 名）の参加が確認され、連日フロアは満席であった。さらに、参加者の国籍も多岐にわたり、国際的な注目度も高いイベントであった。本会議の情報は、[ヨーロッパにおける最新のイラン学の成果を紹介するウェブサイト](#)に事前に掲載されたほか、[Association for the Study of Persianate Societies](#) のニュースレター、[ミュンスター大学内の Translapt プロジェクトのウェブサイト](#)でもその概要についての報告がなされた。

本会議の成果については、[Brill 社の Handbook of Oriental Studies シリーズ](#)から、査読付きの英語論集として 2026 年秋に刊行することを目指している。既に、Brill 社の担当者には、本会議のスクープに合ったシリーズについて相談済みである。発表者、本研究課題のメンバー、チェアに寄稿を呼びかけたところ、本共共課題メンバー全員を含む合計 20 名から前向きな回答があった。現在、神田および Bockholt は、Brill 社に提出するためのブック・プロポーザルを準備中であり、近日中に提出される見込みである。

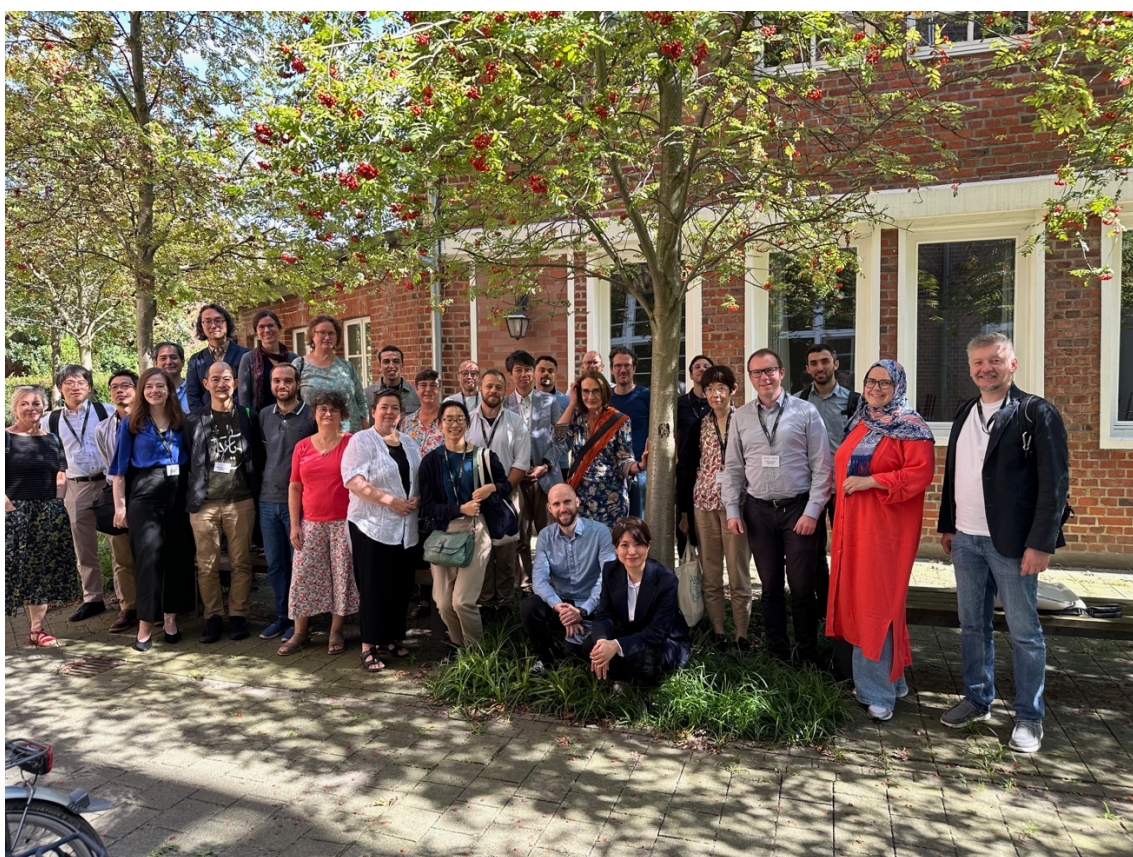
（文責：神田 惟）



↑主催者による開会挨拶 (9/5)



↑水上遼氏 (AA 研/JSPS) による研究報告 (9/6)



↑発表者、チェア、参加者を交えた集合写真 (9/7)